超訳万葉集

佐佐木定綱

万葉集がいま話題である。『愛するよりも愛されたい』(佐々木良・万葉社）という本が売れているのだ。

副題に「令和言葉・奈良弁で訳した万葉集」とあるように、内容は奈良弁現代語訳万葉集である。

　ねぇねぇそこの山菜摘みのお嬢ちゃん！
　素敵なカゴとハサミ持ってはるねぇ
　おうちはどこなん？　名前も知りたいわぁ　教えてよ
　教えてくれへんのやったら僕からいおうかな？
　ヒント「僕は総理大臣とか任命できる人です」

もとは万葉集巻頭「籠もよ　み籠持ち　掘串もよ　み掘串持ち　この丘に　菜摘ます児　家聞かな　名告らさね　そらみつ　大和の国は　おしなべて　われこそ居れ　しきなべて　われこそ座せ　われこそは　告らめ　家をも名をも」。

　弥彦山の神社に今日も鹿（？）来てる！
　毛皮の服来てて角生えてるヤツ！
　#せんとくんかもしれない
　#ナライガーかもしれない

巻十六三八八四番歌「弥彦神の麓に今日らもか鹿の伏すらむ皮衣着て角つきながら」。

「#」はSNSで使われるハッシュタグだ。同じハッシュタグで投稿している人を見つけることができる。今回の訳文のようにいまでは手紙の「P.S.」、追伸のようにちょっとした付け足しでよく使われる。「せんとくん」はゆるキャラ、「ナライガー」はご当地ヒーロー。

副題の「令和言葉」は、ただの現代語訳ではなく、絵文字やSNSの構文、そして若者の口語（それも少し軽い）といったことらしい。つまり、万葉集の時代にSNSがあったなら、という本である。

訳文は超訳と言っていいものであり、著者も「気軽に読んでもらえれば」という本なので、訳についてその好き嫌い、是非は置いておいて、これが人気というのがおもしろい。

有り体に言ってしまえば歌は人の心を伝えているので、万葉の時代でも現代でも言葉が違うだけで、底に流れる普遍的なものは変わらず、それを知らなかった人々にも新鮮な驚きを持って迎えられている。という感じだろうか。ただ、もともと古典が好きな人が面白がるというのはわかるが、それ以上に古典に興味のある層自体は分厚いのだなと気付かされた。

時代は「ゆるさ」なんだなぁと思う。この訳文のゆるさが、なんとなく興味あるけど……という人々を動かした。硬いものを咀嚼する力がないというより、柔らかいものなら食えるのだ。

好評につき第二弾『太子の少年』も出た。「言はむすべせむすべ知らず極まりて貴きものは酒にしあるらし」を引いておく。

　誰がなんといおうとも
　世界でもっとも尊きは
　酒!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!